
Triple J

綾小路まるねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Triple J

【Nコード】

N4642Q

【作者名】

綾小路まるねこ

【あらすじ】

派手な姉、日野ひかり。
地味な妹、日野あかり。

似て非なる双子の姉妹。

しかし、共に目指すは日本一。

柔道（JUDO）&柔術（JIU-JITSU）に燃える女子高生
（JOSHII-KOSEI）格闘技系青春コメディー。

序章一 幼少時代

小さい頃の思い出。

場所は私が住んでいる街にある、体育館の柔道場。そこで私、日野ひかりは柔道をやっていた。

対戦相手は日野あかり。私の双子の妹。乱取り稽古（うらんどう）の真っ最中だった。

「シャア、シャア！」

あかりの道衣を掴み、体を左右に振って、あかりを引きつける。

「あわわ……」

私の動きにあたふたするあかり。道衣を掴み返し、体勢を崩さないようにするので必死だ。

自慢じゃないが私は動きの速さに自信がある。試合中、動きまわって相手を翻弄し、ついてこれなくなったところを狙って投げる。

それが私の勝ちパターンだった。

それに対して、あかりはハッキリ言ってトロい。体力的には変わらないのに、どうにも動きが鈍臭い。同じ双子なのにどうして差があるんだろう？

「あかり！ 慌てないで相手をしっかり見ろ！」

横からあかりに激が飛ぶ。

声の主は私たちのお父さん、日野輝雄。見た目は普通のおじさんだけど、その正体は柔道五段で、かつてはダイナマイト級の背負いを武器に、全日本二位にまでなった柔道の猛者。

怒ると怖いけど、普段はおっとりとした優しいお父さん。性格で言えば、あかりはお父さん似かもしれない。

「ヤアー！」

気合いと共に私は体を回転させ、足をあかりの股下に入れる。そして、そのまま引き手を引いて足を跳ね上げた。

内股（うちまた）。私の得意技の一つ。『ズバンッ』という乾いた音と共に、

私はあかりを投げ飛ばした。

「技ありい！」

審判をしているお父さんが今の内股を判定する。引きつけが甘かったか、綺麗に投げられなかったようで今の内股は技あり止まりだった。でも、まだ乱取りは続いている。

「サア！」

私は仰向けになっているあかりの上に乗る。そして、体の横から首と股下に腕を回して、抑え込む。

「抑え込み！」

横四方固めであかりの動きをガツチリ封じ込んだ。

「〜〜！」

声にならない声を上げ、あかりが下から動き回って抑え込みから脱出しようと抵抗する。でも、私は慌てず重心をコントロールして外させない。そして――

「はい、時間！ 抑え込み技ありで、合わせて一本！」

お父さんの声で、私は抑え込みを解く。キツチリ抑え込んで、あかりから一本を奪った。

「まあ、ざつとこんなもんかな」

片手で小さくガツポーズしながら、勝ち誇る私。そして、負けてうなだれるあかりが居た。

少し休憩をはさんだ後、再び私とあかりは乱取りを開始する。

「サア！」

「やあ……」

気合十分の私と、気合の入っていないあかり。

動きの鈍いあかりを他所に、私はとつと自分の組み手に持つていく。そして、あかりが組む前に踏み込み、そのまま前に出ながら足を大きく刈り取る。大外刈りだ。

「うっうー！」

刈り込む瞬間、あかりが私の道衣を掴んでしがみ付く。

「有効！」

私とあかりはもつれる様に同時に倒れた。そして、お父さんが有効を告げる。

「もう一回……、はじめ！」

一回、仕切り直して開始線から乱取りを再開する。

「や！」

今度はあかりから組んでくる。私は慌てずに組み返す。そして、体を左右に振りながら、再度あかりをゆさぶり始める。

「やあ！」

あかりは私の動きなどおかまいなしに投げに来た。掴んでいる引き手を大きく引いて、私の前で体を回転させる。

背負い投げ。あかりの得意技。というか、あかりは背負いしかできない。なので、私は冷静に対処し、腰に担がれる前に体を横にずらして、背負いから抜ける。

「わわっ！」

すかさされたあかりはバランスを崩し、そこに私は体を入れかえて、スツと前に出る。

「シャア！」

そのまま、少し強引に前から足を入れて、体落として投げ返した。一本、それまで！」

大きくバランスを崩していたあかりを投げるのは簡単だった。あかりの体は一回転し、綺麗に背中から倒れた。

「ウツシャ！」

再びガッツポーズを取って、勝ち名乗りを上げる私。

「まあ、あかりが私を投げようなんて、10年早いつて感じ？」

倒れているあかりに、私は余裕綽々で言う。それを聞いて、ションボリするあかり。

キツイ言い方だけど、これが現実。お父さんの影響で同じ時期に揃って柔道を始めたけど、あかりには一度も負けたことが無かった。あかりには当然のことながら、基本的に私は負けが少ない。地元

でもそれなりに名前の通った柔道選手の私。そんな私は柔道が大好きだった。

*

小さい頃の思い出。

場所は私が住んでいる街にある、体育館の柔道場。そこで私、日野あかりは柔道をやっていた。

対戦相手は日野ひかり。私の双子の姉。乱取り稽古の真っ最中だった。

「シャア、シャア！」

ひかりは私の道衣を掴み、体を左右に振って、私を引きつけようとする。

「あわわ……」

私はひかりの動きにあたふたする。道衣を掴み返し、体勢を崩さないようにするので必死だ。

ひかりは動きが速く、また器用に技を繰り出せる。試合中、動きまくって相手を翻弄し、ついてこれなくなったところを狙って投げる。それがひかりの勝ちパターンだった。

それに対して、私はひかりみたいに速く動けないし、不器用だった。体力的には変わらないのに。同じ双子なのにどうして差があるんだろう？

「ひかり！ チャンスがあったら、すぐに仕掛けるのよ！」

柔道場の端からひかりに激が飛ぶ。

声の主は私たちのお母さん、日野陽子。見た目は美人。さらに大手スポーツクラブでインストラクターもやっていた、スポーツウーマン。

強気な性格で怒ると怖い。私もひかりもお父さんも、お母さんには絶対に頭が上がらない。性格で言えば、ひかりはお母さん似かもしれない。

「ヤアー！」

気合いと共にひかりは体を回転させ、足を私の股下に入れる。そして、そのまま引き手を引いて足を跳ね上げてきた。

（内股が来る！）

ひかりの内股に対して、私は何とか体をずらそうとする。しかし、『ズバンッ』という乾いた音と共に、ひかりは私を投げ飛ばした。『技ありい！』

横からお父さんが今の内股を判定する。ギリギリ体をずらしたおかげで、綺麗に背中から落ちず、何とか技あり止まりで済んだ。ホッとする私。しかし、ひかりは手を休めてくれない。

「サア！」

ひかりは仰向けになっている私の上に乗ってきた。そして、体の横から首と股下に腕を回して、抑え込みに入る。

「抑え込み！」

気がついた時には、横四方固めで私の動きは完全に封じ込まれていた。

「~~~~！」

声にならない声を上げて、私は下から動き回って、抑え込みから脱出しようと抵抗する。でも、ひかりは慌てる私を上からコントロールして、外させない。そして――

「はい、時間！ 抑え込み技ありで、合わせて一本！」

お父さんの声で、ひかりが抑え込みを解く。為す術なかった私は、ひかりから一本を取られてしまった。

「まあ、ざっとこんなもんな」

片手で小さくガッツポーズしながら、勝ち誇るひかり。私は負けてうなだれるしかなかった。

少し休憩をはさんだ後、再び私とひかりは乱取りを開始する。

「サア！」

「やあ……」

気合十分のひかりと、気合の乗らない私。

正直、気持ちの入らない私はあつという間にひかりに良いように組まれてしまう。そして、私が組む前にひかりは踏み込んで、そのまま大きく足を刈りにきた。

（大外刈り！）

「ううう！」

刈り込まれる瞬間、私はひかりの道衣を掴んでしがみ付く。

「有効！」

私とひかりはもつれる様に同時に倒れる。お父さんの声を聞いて、何とか有効止まりで凌ぐことができたようだ。

「もう一回……、はじめ！」

一回、仕切り直して開始線から乱取りを再開する。

「や！」

ひかりに何度も良いようにされるのは嫌だった。今度は私から組みにくい。でも、ひかりは慌てた様子は無い。互いに組むと、ひかりはまた体を左右に振りながら、ゆさぶってきた。

「やあ！」

まごまごしていると投げられる。そう思った私は、ひかりのゆさぶりを気にせず、投げにいった。掴んでいる引き手を大きく引いて、私は体を回転させる。

背負い投げ。お父さんに教えてもらった、私の唯一の得意技。不器用な私は、背負いだけをただひたすら練習していた。私はヒザを曲げ、ひかりを担ぎ上げようとする。

「わわっ！」

投げようとした瞬間、急にひかりが軽くなり、私はバランスを崩す。そこにひかりは体を入れかえて、前に出てきた。

「シャア！」

ひかりは少し強引に前から足を入れ、体落として投げ返してきた。「一本、それまで！」

大きくバランスを崩していた私は何もできなかった。私の体は一

回転し、綺麗に背中から倒れた。

「ウッシャー！」

背中をしたたかに打った私の耳に、勝ち名乗りを上げるひかりの
声が聞こえた。

「まあ、あかりが私を投げようなんて、10年早いつて感じ？」

倒れている私に、ひかりは余裕綽々で言う。私はそれを聞いて、
泣きそうになった。

でも、悔しいけど、これが現実。お父さんの影響で、同じ時期に
揃って柔道を始めたけど、ひかりには一度も勝ったことが無かった。
ひかりには当然のことながら、私は他の試合や大会でも勝ちが少
なかった。地元でもそれなりに名前の通った柔道選手の姉に対して、
パツとしない妹の私。そんな私は柔道が好きになれなかった。

序章二 小学生1

「それでは、今度の大会のオーダーを発表するぞ」
今日の練習が終わって。

杉様が来月行われる柔道の大会の出場選手を発表する。杉様というのは、私とあかりが通っている柔道教室の先生。本名は『杉本』だけど、みんなは『杉様』って呼んでる。

「まず、Aチーム。先鋒―田中、次鋒―遠藤……」

杉様がメモを手にして、出場選手の名前を読み上げる。

「中堅―山崎、副将―藤原……」

そして、最後に呼ぶのは当然――

「で、大將は、日野ひかり」

「ハイッ！」

杉様に名前を呼ばれて、私は誇らしげに返事をした。そして、私の名前と所属の入ったゼッケンを受け取る。

「またひかりが大將かよ」

先鋒に選ばれた田中が呟く。

「まあね。悔しかったら、私から一本取ってみなさい」

「ハハハ、うるせーよ」

私と田中が軽口を叩き合う。田中はひよろ長い、もやしっ子な体型だが、意外にも思い切りの良い柔道をする。技は私の方が上だが、田中もAチームのレギュラーとして申し分ない実力者。互いに実力を認め合っていた。

「……で、大將は榊原。補欠で日野あかり。以上」

杉様があかりの名前を呼んだ気がしたが、田中との会話に夢中でまるで耳に入らなかった。

「ねえ、お父さあん」

家に帰って。私はお風呂に入った後、テレビを見ていたお父さん

に甘えた声を出した。

「今度の大会でオール一本勝ちで優勝できたら、青道衣買ってえ。アディダスの肩にラインが入ったヤツ」

私はおねだりする。以前、テレビでやっていた柔道の国際大会。そこで選手が着ていた、いわゆる青のカラー柔道衣。私は一目見てあれが気に入り、どうにか手に入らないかずっと考えていた。

「ひかり、お前な。あれを買ったところで、どこで着るんだ？ 練習でも試合でも着てけないだろ」

「いいじゃん、私が着たいんだからさあ。ねえ、買って買って買ってえ」

お父さんの反論に耳を貸さず、服を引っ張ってねだる私。

「わかったわかった。考えておくから、服を離しなさい……」

「ホントッ！？ ヤッター、お父さん大好き！」

根負けしたお父さんの言葉に、私はバンザイしてお父さんに抱き着いた。

「やれやれ……。喜ぶのもいいけど、足元すくわれないようにな」
「ハイ」

お父さんは呆れたように呟く。そんなお父さんの態度も気にせず、甘える私。しばらくそうしていると、私の後にお風呂に入ったあかりが、タオルで頭を拭きながら出てきた。

「あかり！ お父さんがね、今度の大会で優勝したら青道衣買ってくれるって！」

私は有頂天になりながら、青道衣の事をあかりに言った。しかし、あかりは「へえ……」と、イマイチつれない返事。

元々、あかりは青道衣にそれほど興味が無かったから、リアクションとしてはこんな程度かもしれない。ただ、それで流されたら私が面白くない。

「あかりもおねだりしたら？ あっ、あかりは選手じゃないから無理か」

からかう様に私が言う。すると、急にあかりの顔が暗くなった。

「ひかり」

あかりが何かを言う前に、後ろからお父さんが私を呼んだ。声のトーンが低く、明らかに怒った口調。

（ヤバッ、怒られる！）

素早く危険を察知した私は、足早に自分の部屋へかけていった。お父さんの呼ぶ声と、俯いているあかりを無視して。

*

「それでは、今度の大会のオーダーを発表するぞ」
今日の練習が終わって。

杉本先生が来月行われる、県民柔道大会の出場選手を発表する。
杉本先生は、私とひかりが通っている柔道教室の先生。柔道六段で、優秀な選手を育てた名伯楽として県下では有名な先生だった。ちなみに、お父さんもコーチとして私たちと一緒に練習に参加している。
「……で、大將は、日野ひかり」
「ハイッ！」

先生が出場選手の名前を次々読み上げる。そして、最後にひかりの名前が呼ばれた。名前を呼ばれて、ひかりは誇らしげに返事をしていた。そして、満面の笑みで名前と所属の入ったゼッケンを受け取る。

「では、次はBチーム」

杉本先生が二つ目のチームメンバーを読み上げる。この大会では道場ごとに二チームまで出場可能になっている。とは言っても、主力選手はひかり達のAチームで、Bチームは悪く言えば二軍の選手たちだった。

「先鋒―兵藤、次鋒―森永、中堅―佐々木、副将―八木……」

次々と名前が呼ばれていく。そして――

「大將は榊原。補欠で日野あかり。以上」

最後の最後。二軍の補欠という位置で、私の名前が呼ばれた。

先生から私の名前が入ったゼツケンを受け取る。補欠なので試合をする機会は多分ないだろうけど、それでも選手の一人として大会に出る事になった。ゼツケンを受け取った私はみんなのところに戻る。

「なんであかりが選ばれるんだ？ ひかりと違って大して強くないじゃん」

「ひいきに決まってるんだろ。コーチの娘なんだから」

不意に嘲りの声が聞こえる。その声には『ギョッ』と胸を締め付けられる思いがした。下を向く。顔を上げられない。俯いたまま、泣きそうになる私。

「何、馬鹿なこと言ってるのよ、アンタたち！」

すると、私に対する言葉に食ってかかる声が聞こえた。

「あかりはね、いつつもいつとも一生懸命練習して。アンタたちみたいにチンタラポンタラ練習してる連中とは訳が違うんだから！」

「森ちゃん……」

顔を上げるとBチームの次鋒に選ばれている、森ちゃんが男子二人に怒鳴っていた。

森ちゃん。名前は森永公美子。私と同学年で、女子の中でひかりとAチームの山崎さんに次いで3番目に強い実力者。70キロを超える大きな体で、その体重を活かして圧力をかける柔道をする。

「うるせーな、デブ！」

「何よ、私とやろうっての！」

「うっ……」

森ちゃんが二人を睨みつける。ただでさえ大きな体で力もあり、柔道の実力もある森ちゃんに睨まれて、二人は怯んだ。

「森ちゃん、もういいから……」

私は後ろからそつと仲裁に入る。

「あかり、アンタもちゃんとやらないとダメよ。ガツンと」

「うん……」

森ちゃんは私にそう言って更衣室に入っていく、この場は一先ず

治まった。

家に帰って。お風呂に入り、湯舟の中で色々と考える。

考えるのはもちろん柔道の事。双子の宿命で、私とひかりはどうしても比べられる。別に普段から練習を怠けてるつもりはない。なのに、何でこれほどまで差があるんだろう？

ひかりはひかり。私は私。自分でそう考えても、周りはそう見てくれない。

「はあ……」

私は大きいため息をつく。考えれば考えるほど、よくない考えが浮かんでくる。

「やめよ、考えるの。とにかく、練習しよう。そうすれば……」

上手くいくだろう。少なくとも、下手に考えるよりはマシだろう。私はそうポジティブに考えを変えて、お風呂からあがった。

「あかり！ お父さんがね、今度の大会で優勝したら青道衣買ってくれるって！」

お風呂から上がると、ひかりが満面の笑みを浮かべながら私にそう言ってきた。しかし、私は「へえ……」と、曖昧な返事をした。道衣についてはメーカーによって着心地の良し悪しはあっても、別に色については何とも思ってた。だから、ひかりが何をそんなに喜んでいるのが、私にはまいちピンとこなかった。

私の返事を聞いて、ひかりの顔つきが若干、ムツと険しくなる。話に乗らなかった私を、快く思わなかったんだろう。

「あかりもおねだりしたら？ あっ、あかりは選手じゃないから無理か」

不意にからかう様にひかりが言った。その言葉に、私の心に何かが重くのしかかってきた。何も言い返せず、私は俯く。

「ひかり」

顔を上げられない私の後ろから、お父さんがひかりを呼んだ。そ

の声は低く、明らかに怒った口調。

「……！」

お父さんの声を聞いて、ひかりがハッと息を飲む。そして、お父さんの呼ぶ声を無視して、ひかりは足早に自分の部屋へかけていった。私はひかりがいなくなった後も、ずっと俯いたままだった。

「ねえ、お父さん……」

俯いたまま、私は口を開く。

「同じ双子なのに、何で私とひかりは違うのかな？」

「あかり……」

「私だって一生懸命やってるよ？　なのに何でひかりばかり上手くなるの？　何で私は上手くならないの？　私、才能無いの？　私、柔道辞めた方がいいの……？」

目から涙が零れる。そして、今までずっと溜めてきた暗い気持ちが溢れ出した。

「あかり」

お父さんが私の前にしゃがみ込み、私の目をじっと見つめる。

「あかり。お前は今まで柔道やってきた事を後悔してるか？」

お父さんが私に問い掛ける。その口調は優しくかった。

「……うつん」

私は首を横に振る。何かにつけて、ひかりと比べられるのは嫌だった。でも、柔道そのものが嫌になったことは一度もなかった。

「なら、それでいいんだ。あかり、周りが二人を比べるのは、どうしようもない事だ。だが、お父さんは二人を比べた事はないし、お前が今まで柔道に打ち込んできた事は、決して間違っていないと思う。これだけは忘れないでくれ」

そう言っ、お父さんは私の頭を撫でた。私はお父さんの言葉を聞いて、気持ちが軽くなった気がする。

間違っていない。この一言で私の暗い気持ちはどこかに消えてしまった様な気がした。

序章三 小学生2

「やるからにはあ！」

『絶対優勝！』

「狙うはあ！」

『イッポーンッ！！』

季節は秋。待ちに待ったこの日。県民柔道大会が行われた。

私たちは、畳が敷かれている会場で円陣を組み、大声を出して気合いを入れる。AチームとBチーム、補欠を入れて12人。

ちなみに、音頭を取るのは当然のことながら、Aチーム大将の私だった。

「ええ、Aチームの皆さんは私の青道衣が懸かってますので、特に頑張ってください！」

「知るかよ、そんなこと！」

私の言葉にすかさず田中がツツコミを入れる。それを聞いてみんなも笑い出す。選手みんな、試合慣れしてるのでかなりリラックスできていた。

「おい、お前たち」

『あ、おはようございまーす！』

私たちの前にスーツ姿の杉様が現れた。杉様は県内の柔道連盟では結構エライ先生で、今日も役員の一人として大会に顔を出していた。

「今日は県下の親善試合みたいなものだから、気負わずにな。結果は気にせず、積極的に行け」

『はい！』

杉様の言葉に大きく返事をする。とは言え、私には青道衣が懸かっているのだ。積極的に攻めて結果を出す。そう心に決めて、私は試合が始まるのを待った。

「オカ！ 下がるなあー！」

「いいよ、フジワラ！ いいよ、フジワラア！」

試合が始まった。自チーム、相手チーム共に声を張り上げて応援する。

今、試合をしてるのはAチーム副将の藤原。既に勝敗は3 - 0で私たちの勝ちは決定している。後は藤原と私が、その勝利に花を添えるだけ。

「とあああ！」

気合いと共に藤原が投げを打つ。体格はウチの道場内で、Bチームの森永に次いで二番目に大きい。その体格を活かし、大きく引きつけてから体を回転させ、足で相手を払い上げる。

払い腰だ。

「よいしょお！」

藤原の払い腰に合わせて、私たちは掛け声を出す。藤原はその声と同時に、相手を一気に投げ飛ばす——とはいかず、三歩くらいピョンピョンした後によやく相手を投げた。

「一本！ それまでえ！」

主審が手を高く挙げる。不格好ながら、藤原の払い腰は相手を宙に舞わせ、何とか一本を取る事ができた。

「ヘタクソな払い腰だな！」

「技かけてから、何秒かかってんだよ！」

戻ってきた藤原に、一斉に罵声を浴びせる。とは言っても、顔はみんな笑顔だった。

「赤！ 大将、日野ひかり！」

さて、次は私の出番。一つ、派手にいきますか。

「それでは……、はじめえ！」

「シャア！」

「うらあ！」

主審が試合を開始した。私と相手の大将はそれと同時に大きく気

合いを入れる。相手は私より二回りぐらい大きなふとつちよの男子。とはいえ、大きい相手なら森永や藤原で慣れている。

（さて、何で決めようか……）

私は組まずに間合いを計りながら考える。大きい相手を背負い投げで思いつきりブン投げる。それが一番派手な勝ち方だと思うけど、初戦から体力なんか使ってられない。かと言って、判定勝ちは論外。勝つなら、当然一本勝ち。それなら――

「サツ!!」

作戦が決まると私は一気に間合いを詰め、素早く右手で相手の襟を掴んだ。そして、下から掬い上げる様に相手の重心を起こし、左手で足を掴む。そのまま押し上げるように、朽木くちきたお倒しで相手を後ろに転ばした。

「有効!」

主審の判定は有効。大きい相手からの一本はやっぱり容易じゃなかった。それでもいい。私の目的は――

「抑え込みい!」

そのまま、覆いかぶさるように縦たてしほう四方固めで抑え込んだ。下からひっくり返されない様に足も絡めておく。そして――

「一本! それまで!」

きっちり抑え込み、寝技で一本。私は幸先の良いスタートを切った。

*

「榊原! 慌てんな!」

「下が空いてるよ! 足掛けて! 足!」

自チームと相手チームが声を上げて応援する。

現在、試合は三回戦。ひかりが率いるAチームは全員が一本勝ちという、圧倒的な強さで既に四回戦進出を決めている。

そして、Bチーム。今、大将の榊原君が、四回戦進出を掛けて試

合を行っていた。現在、スコアは1 - 1の2分け。Aチームと違い、Bチームは一回戦から毎回、ギリギリ勝ちを拾っていた。

「榊原君、ファイトー！」

みんな、固唾を飲んで試合を見守っている。私も何とか力になりたかった。しかし、補欠の私にできる事と言えば、声を上げて応援する事しかなかった。

「だりやああ！」

『よいしょお！！』

榊原君が大きな気合いと共に得意の内股を仕掛けた。それに呼応して、応援にもグツと力が入る。そして――

「一本！ それまで！」

『バンツ！』という畳を打つ音と共に、綺麗に投げが決まった。

「ナイス！ 榊原！」

「ヨッシャー！ お見事！」

榊原君の一本勝ち。それによって、私たちの四回戦進出が決まった。

「うっうっ！」

しかし、そんな私たちの喜びムードを吹き飛ばすアクシデントが起きてしまった。

「大丈夫か、榊原！」

「榊原君！」

私たちは慌てて試合場上がる。榊原君は足首を押さえながらうずくまっていた。投げた後、相手の選手が榊原君の軸足に乗ったらしい。

「ちょっと下がって！」

審判の人が私たちを下げる。そして、大会ドクターの先生が試合場に現れた。その先生は素早く患部にコールドスプレーを吹き掛けると、榊原君の足を念入りにチェックする。

「骨まではいってないと思いますけど、念のために病院でレントゲ

ンを撮った方が良いかもしれませんね。この後の試合は……、ちょっと無理でしょう」

先生がそう診断する。この後、榊原君はタン力で試合場を下り、榊原君のお母さん、父母会の世話役の人に付き添われて、そのまま病院に向かつていった。

「榊原君、大丈夫かなあ？」

「大丈夫よ、アイツなら」

心配そうな私に森ちゃんが声を掛ける。

「それよりもあかり、アンタこそ大丈夫なの？」

「え？」

森ちゃんが私の顔を見て言う。何の事だかわからず、戸惑う私。

「榊原がいなくなつたから、Bチームの大将。あかり、アンタがやるんだからね！」

そう言つて、森ちゃんは大きな声で笑い出した。

*

『ただいまより、小学生の部、団体戦四回戦を行います。選手の方は……』

館内にアナウンスが流れる。それを聞きながら、私は入念にストレッチを行う。

この試合に勝てば準決勝進出。さらに、そこから2回勝てば優勝が決まる。

（後3回勝てば、青道衣……）

「ウフツ、ウフフフ」

顔が緩んでくる。今日は絶好調。これまでの試合は全て一本勝ちで来ている。そして、この後の試合もできない事は何も無いという、自信があつた。

「ひかり……」

名前を呼ばれて振り返る。緩んだ顔はしっかり引き締める。そし

て、振り返った瞬間に凍り付いた。

「あ、あかり……？」

「つ、次の試合……。ががが、頑張つてね……」

振り返るとあかりがいた。『頑張つて』と私を励ますあかりの顔は顔面蒼白。『お前がガンバレよ』とツッコミたくなる。そういや、Bチームは榊原が欠場だという。それであかりにお鉢が回って来て、物凄い緊張してるってわけか。

コイツ、試合に出ない気、満々だったな。

「ひかり！ 試合始まるぞ！」

試合場の方から田中が大声で私を呼んだ。

「うん、今行く！」

私はド緊張のあかりを伴って、試合場に向かった。

「藤原！ 腰引くな！」

「自分から攻めるよ！ 自分から！」

声を張り上げて応援する。流石は四回戦。ベスト8にもなってくると、簡単には勝たせてはもらえない。

先鋒戦は田中が得意の大外刈りで一本勝ちし、先制。しかし、次鋒の遠藤が逆に一本負けして1 - 1となってしまう。中堅の山崎は引き分け。そして、今試合をしている藤原は――

「それまでえ！」

『ああ……』

みんなから落胆の声が漏れる。藤原は試合開始直後に足を払われ、技ありを取られていた。そして、それを取り返す事無く、時間切れで負けてしまった。

これで1 - 2の1分け。ここを勝ち進むためには、技ありを取って代表戦に持ち込むか、一本勝ちして、内容勝ちにするしかない。つまり、私に全てが掛かっている。

「それでは大将戦を行います。赤、日野ひかり！」

「シャッ！」

名前を呼ばれ、私は気合いを入れる。

「ひかり！ 頑張つて！」

あかりが声を掛けてくる。

「あかり」

私は振り返り、あかりの顔をじつと見つめる。

「先に準決勝で待つてるから」

「……！」

そう。次は両チーム勝ち上がったら、奇しくも準決勝で対戦する事になっていた。今の言葉で顔が引きつるあかり。その顔を見て、私は満足して試合場上がった。

まあ、あかりにああ言った手前、負けちゃったらお話にならない。私は顔を『パチンツ！』と叩いて気合いを入れる。そして、大きく深呼吸して相手を見た。

対戦相手は私よりも一回り大きい男子。かと言って太ってるわけじゃなく、体は締まってる。タイプのには田中に近い感じ。それともう一つ――

（何笑つてんの、コイツ。ひょっとしてナメられてる？）

試合場が上がってお互い見合わせた時、コイツは私の顔を見て、明らかに笑った。それもム力つくような、ニヤツとした笑い方で。多分、女だと思って侮ってるんだろう。それならそれでいい。そういう事は今まで何度かあったし、そういうヤツをブン投げる事がどれだけ気持ちいいかも知っていた。

「それでは……、はじめ！」

「シャアッ！」

「おおー！」

主審が試合を開始する。気合いを入れ、私は素早く組みに行った。油断しているのか、相手はゆっくりと組みに来る。

（やっぱりナメられてる。それなら……）

私は右手で相手の襟を掴む。そして、左に一瞬寄り、相手が堪えたところを素早く右に切り返し、右手を引きながら右足で払う。支ささ

え釣り込み足。^{こあし} 相手は私の前にひざまずいた。

「有効！」

主審が判定を告げる。相手がガク然とした顔で私を見、私はそれを見下す。

「クソッ！」

相手は慌てて私の足を掴んで寝技に持ち込もうとするが、私は付き合わずに素早く離れる。

「待て！ 開始線に戻って」

主審から待てが掛かる。私は道衣を直し、息を整えながら相手を見る。

「……」

黙ってはいるが、その表情は悔しさを物語っていた。

（これで気持ち的に上に立てるかな……？）

私はそう考えながら、帯を締め直し試合に集中する。有効は取ったけど、ここを勝ち上がるには技あり以上じゃないと意味がない。今のうちに一気に攻めて、勝たせてもらおう。当然、一本勝ちで。

「それでは、始め！」

「サアッ！」

主審の試合開始の合図と共に、私は打って出る。そして、素早く組んで揺さぶりを掛ける。相手は油断は無くなったものの、動きはまだ硬かった。

「慌てんな、ヤナセ！ しっかり組んで自分の柔道をやれ！」

「はいっ！」

向こうの監督から激が飛ぶ。

（ヤナセって言うんだ。ヤナセ対日野って、自動車メーカーの対決？）

私は揺さぶりを掛けながら、試合中にも関わらず、そんなような事を考えていた。

「慌てんな、ひかり！ あと、一つ！ まだまだ時間はあるぞ！」
時計をチエックしながら、田中君が声を張り上げる。でも、その田中君の表情は硬かった。それもそのはず。最初に有効を取ったものの、それで降、ひかりの繰り出す技は全て防がれていたからだ。手技、腰技、足技。どの技も平均以上にこなすひかりだけど、そのどれもが凌がれていた。このまま時間切れになれば、有効一つでひかりの勝ちにはなるけれど、チームとしては勝ち上がれない。Aチームが準決勝に勝ち上がるには、ひかりは一本勝ちしなければならないかった。

「サア！」

ひかりが気合いを出す。一見、攻勢にも見えるけど、どうにも攻めあぐねている様子のひかり。ひかりの顔から試合前にあった余裕は感じられなくなってきた。一方、相手は攻められてはいるものの、その表情にはまだ余裕があった。

「ひかり、ファイト！」

私は声を張り上げ、ひかりを応援する。その声に反応したのか、ひかりは一瞬だけこつちを見た。そして――

「ヤアツ！」

ひかりは組んだまま、気合いと共に背中から畳に付いて相手を引き込んでいった。

*

「ヤアツ！」

いちかばちか。私は練習でも滅多にやらない捨て身技、巴投げを仕掛けた。

成功率はかなり低い。正直、有効すら取れば儲けものだった。でも、構わない。出せる立ち技は全て出し尽くしていた。だとすれば、残る手は――

「寝技にいった！」

「ヤナセ、立て！ 付き合わなくていい！」

（そうはいくか！）

私は下から素早く引き込む。巴投げは寝技への仕掛け。立ち技がダメなら寝技で勝負。ヤナセは何とか立ち上がるうとするが、私は組んだ手を離さない。そして、ヤナセの足に私の足を引っ掛け、体を横に流す。

「すげえ！ 小さいのがひっくり返したぞ！」

観客の驚いた声が入る。上手く下から上になった私は、慌てるヤナセを横四方固めで抑え込んだ。

「抑え込みい！」

主審が抑え込みを宣告する。

（やつと勝った……）

もう絶対に離さない。このまま、30秒キツチリ抑え込んで一本勝ちだ。

「ヤナセ！ 無理に返そうとしなくていいから、場外に出ろ！」

安堵する私に冷や水を掛ける声。仕掛けた場所が悪かったか、かなり場外に近かった。場外に出れば抑え込みが解ける。ヤナセは体をずらしながら、場外へ移動し始めた。

（逃すかッ！）

暴れながら体をずらして場外へ向かうヤナセを、逃さない様に抑え込む。胸を合わせて何とか重心をコントロールしようとするが、体格差で劣るため、徐々に場外に持つてかれていく。

（早く！ 早く時間経って！）

私は必死で抑え、ヤナセは必死にもがく。しかし、その祈りも空しく――

「場外！ 待て！」

主審が試合を止める。私はヤナセを抑え切れず、場外で抑え込みを解かれてしまった。

「クソー……」

顔を歪め、私は悔しがる。もうヤナセには巴投げでの引き込みは通じない。立ち技は全て凌がれた。寝技にも持っていけないだろう。打つ手無し。試合を投げたくはないが、今の私にヤナセを仕留める事は無理だと悟った。

「それまでえ！」

結局、私は最後までヤナセを攻め切ることができなかった。しかも――

「勝者、白！」

巴投げからの寝技で握力を使い果たし、最後は力が入らず、ヤナセの払い腰を踏ん張れなかった。私は一本負けで敗れ、Aチームも四回戦敗退となった。

（ヤナセ……。次は必ずリベンジしてやるからッ）

負けてしまった事を悔やんでも、もう戻らない。私は負けた悔しさを、次回への対戦に向ける事にした。

*

四回戦で敗れ、試合場を後にするひかり。ひかりの表情は意外にもサバサバしていた。でも、その内面は悔しさでいっぱいだろう。

「ひかり……」

私はひかりに近づき声を掛ける。

「あーあ、負けちゃった。これで青道衣はおあずけか……」

私の顔を見て、そう呟くひかり。

「残念だったね……。でも、今日で終わりじゃないし、次にまた頑張ればいいじゃない……」

自分でもイマイチ気の利いた言葉では無いと思いつつ、何とか励まそうと言葉を掛ける。

「そうね……」

私の言葉を聞いて、間を置く。

「まあ、今日はこういう結果だったけど、あかりが一本負けするところを見れば、少しは気が晴れるかもね」

「……！」

ひかりの言葉に胸が痛くなる。私はひかりの憎まれ口に、返す言葉が出なかった。

「嘘よ」

そんな私の様子を察して、ひかりは一言だけ弁解する。

「あかり。私の事よりも自分の心配しなさいよ。Bチームの試合、すぐ始まるでしょ？」

「う、うん……」

『ただいまより、小学生の部、四回戦第二試合を行います……』

ひかりの言葉に頷くと同時に、館内に呼び出しのアナウンスが流れた。私は言われた通り、一先ず、試合に集中することにした。

「まさか、こんな事になるとはね……」

私と森ちゃんが、掲示板に貼り出されているトーナメント表を見ながら話す。

試合は四回戦を終了。現在、試合場では高校生の試合が行われている。私たち、Bチームの試合は1 - 0の4引き分けで辛くも四回戦を勝利していた。

唯一の一勝は森ちゃんの内股での一本勝ち。そして、私を含めた残り4人がその一勝を守り通す形で準決勝進出となった。私の試合は初戦という事を差し引いても、良い試合とは言えないモノだったけど――。

「次は流石に勝ち上がれないね」

準決勝に何とか勝ち上がったBチーム。しかし、次の対戦相手はさつきAチームを敗った強豪チーム。しかも、私が大將戦で当たる相手は柳瀬って言う、ひかりから一本勝ちしたあの人。どう考えても、勝てる気がしなかった。

「まあ、確かにそうかもしれないけど、私はすんなり終わらせるつ

もりはないわよ。負けたとしても、何か一発ガツンとかましてやらないと」

森ちゃんは鼻息を荒くして言う。確かに森ちゃんの言う通り。どうせ負けるにしても、ここは気弱にならずガツンとやってやりましようか。

やってやる。そう気合いを入れて試合に挑む。しかし、そんなに上手く事が進むわけもなく――。

『あゝああ……』

みんなから落胆する声が漏れる。今行われていた準決勝の副将戦で、副将の八木君が力及ばず、敗れてしまったからだ。これでスコアは0 - 4。ガツンとやってやろうと思っても、やはり相手が強かった。

後、残るのは私の大将戦のみ。既に準決勝敗退は決まっているが、何とか一矢報いたかった。

「それでは、大将戦。赤、日野あかり！」

「はい！」

私の名前が呼ばれる。私は返事をし、試合場にかかる。

「あかり」

――とその時、ひかりが私を呼び止めた。

「あかり。この場面、三五十五なら投げるから。粉川巧には絶対に無理だけど」

「！ 何言ってるのよ、ひかり！ 粉川君なら決めるに決まってるじゃない！」

何を言い出すのかと思えば――。ひかりの言葉に、今回は私も思わずムキになった。

三五十五は『柔道部物語』。

粉川巧は『帯をギュツとね！』。

共に柔道マンガの主人公で、三五派のひかりと粉川派の私は『どちらが強いのか論争』で、事あるごとに言い争いをしていた。

「何をしてるんだ？ 早くしなさい」

「あ、す、すいません……」

主審の人が私を呼ぶ。私はひかりとの話を打ち切って、慌てて試合場上がった。

「あかり。どうせ負けんだから、思い切って投げにいきなさいよ。アンタの下手な背負いも、数打ちや当たるかもね」

ひかりが後ろから言葉を掛ける。私は一瞬だけ振り返り、ひかりの顔を見て頷いた。

「お待たせしました」

開始戦に立ち、遅れた事に頭を下げて、一つ大きく深呼吸する。肩を解して相手を見る。さっき、ひかりから一本勝ちした柳瀬。既に勝敗が決まってる事と、対戦相手がさっき負かした相手の妹と知ってか、余裕の表情を浮かべていた。

しかし、ひかりの時のような相手を舐めた態度では無かった。

「それでは、始めえ！」

「さあ！」

「ウラア！」

主審の合図で試合が始まった。相手は私よりも一回り大きい。そう簡単に上手く組ませてくれないだろう。私は自分の襟を押さえながら、じつくりと柳瀬の出方を伺う。厄介な相手だなと思う。しかし、『負けて当然なんだから、やりたい様にやってやる』と考えれば、自然と気持ちは楽になっていた。

「やめやめやめやめ！ 場外！ 開始線に戻って！」

私と柳瀬が分けられる。私は道衣を直しながら、開始線に立つ。

（やっぱり強い……）

素直に思う。試合時間は1分を経過。この1分間、私は柳瀬に攻められっぱなしだった。

正直、立ってられる気がしない。相手の仕掛けてくる技を凌ぐので精一杯。ここまで既に有効2つを取られている。仕留められるの

は、時間の問題の気がした。

「あかり！ アンタ、このまま終わらす気！？」

森ちゃんから激が飛ぶ。そうだ。私はまだ、技を出していない。負けてもいいから、やりたい様にやってやる。試合前に考えてた事を思い出し、私は覚悟を決めた。

「それでは……、続行！」

「うりゃっ！」

いちかばちか。私は主審の合図と同時に打って出た。柳瀬が身構えるよりも早く組み、一気に自分の体勢を作る。そして――

「りゃああああ！」

返されようが、何をされようが。私は一切を気にせずに、背負いにいった。ひかりにヘタクソと馬鹿にされても、お父さんに教えてもらって、ひたすら練習した背負い投げ。

当たって砕ける。

そう腹を決めて、投げを打った。

序章四 転機

ほんの小さな出来事が、その人の未来を大きく変えてしまう事がある。はたから見れば、道に落ちている小石につまづいた程度の不幸でも、その人にとっては人生を左右する出来事かもしれない。

日野ひかり。柔道が得意と言い切る、私の姉。

ひかりにとって、柳瀬との試合は間違いなくそれに当たった。柳瀬の序盤の油断を除けば、あの試合、ひかりは完敗だった。とは言え、負けた試合はこれまでも何度かあったし、すぐに調子を取り戻すと思っていた。

しかし、あの日、あの試合の後、ひかりは変わった。普段のひかりはいつもと変わりは無い。でも、それまで柔道に向けていた熱心さは消え、柔道教室も休む様になった。

そして、小学生最後の公式戦。ひかりは選手として選ばれるも、頑なにそれを辞退する。結局、ひかりの代わりに私が選手として出場する事になり、ひかりはそのまま引退に近い形で、柔道から身を退いた。

そして、月日は流れ、中学に入学。

私は柔道教室に通いながら、中学校の柔道部に入部。日々、柔道に打ち込む生活を送っていた。だけど、ひかりは陸上部に入り、柔道とは完全に無縁な生活を送っていた。

さらに月日は流れ、私とひかりは高校受験を迎える中学三年生となる――。

*

ほんの小さな出来事が、その人の未来を大きく変えてしまう事がある。はたから見れば、道に落ちている100円を拾った程度の幸運でも、その人にとっては人生を左右する出来事かもしれない。

日野あかり。柔道がヘタクソだった、私の妹。

あかりにとって、ヤナセとの試合は間違いなくそれに当たった。私がまるで歯がたたなかったヤナセを、綺麗な背負い投げで仕留めたあかり。

これは単なるまぐれ勝ちかもしれない。でも、あかりはこの試合で背負いを自分のものにし、ここから一気に急成長していった。

そして、私は、柔道を辞めた。

ヤナセとの一戦で、私が柔道に対する情熱を失ったと、みんなはそう思っているらしいが、それは違った。私が柔道から身を引いた本当の原因は、あかり。あかりがああの試合で見せた、背負い投げだった。

幼い頃の記憶にある、お父さんが試合で見せた綺麗な背負い投げ。私が何度やっても真似できなかったあの背負いを、あかりがやってしまった。あかりがヤナセを投げた時、私は子供ながらに戦慄が走った。

そして、悟った。もう、あかりには勝てない、と。

子供の馬鹿な思い込みかもしれない。でも、私にとってはどんな事よりもリアルな現実だった。

そして、月日は流れ――。

序章五 ひかり、中学生

「ああ、疲れた……」

私は愛用のロードレーサーを降りて、一息ついた。シャーシに付いてるホルダーからペットボトルを取り出し、ぬるくなったスポーツドリンクを一気に口に流し込む。

「はあ、しみるなあ……」

ペットボトルのキャップを締め、ホルダーに戻す。

「ああ、ホント疲れた。でも、それなりに楽しかったか」

この日、私は一人でツーリングに出掛けていた。陸上部で長距離走の選手をやっている私は、最初はスタミナ強化の足しになればとお母さんのチャリを拝借して始めたのだが、今では軽くハマッて、休みの日はアツチコツチ遠出していた。最初は友達も誘ったりしたが、どうにも私のペースがきついらしく、結局一人旅になってる。あかりを誘った事もあった。しかし、あかりには柔道部の練習が忙しいからと断られた。

「今日も練習してんのかな？」

あかりは入部当初から頭角を現し、中二からは柔道部のポイントゲッターとして活躍していた。

「柔道か……」

ロードを押しながら、私は何とも言えない気持ちになって、ため息をつく。

柔道をやらなくなつてから、もう二年近く。それでも、柔道の事を考える。私にとって柔道は全てだったし、すぐ隣には活躍している人間がいるんだから、当然だった。

何食わぬ顔して再開すれば良いのかもしれない。元はと言えば私の、あかりに対する思い込みでやらなくなっただけなのだから。

でも……。それでも、踏ん切りがつかない。

「何か、きっかけでもあればなあ……」

ため息を吐き、小さく呟きながらチャリを押す。と、その時。レンジ張りのマンションの前を通り掛かると、私のすぐ前で『ガチャッ』とガラスのドアが開いた。

音がしたので、何の気も無しにドアの方を見る。そして、そこで私の動きが止まった。

「それじゃあ、組んだら始めてください」

ドアを開けた男の人が、中に向かって声を掛ける。

（柔道衣？ でも、違う？）

その男の人をまじまじと見る。男の人は柔道衣を着ていた。ただ、その道衣のアチコちに派手なワッペンやパッチワークが施されていた。

（えっ？ 何なの？）

急に好奇心が沸いて来る。私はロードを押すのを止めて、男の人が入って行った室内を覗き込んだ。元はコンビニが入ってたような、ガラス張りのテナントの一室。その中は一面、ブルーのマットが敷き詰められている。

そして、そこでは今の男の人を含めた、十数人ほどの男女が道衣を着て、寝技を行っていた。

（柔道？ でも、動きが全然違う……）

柔道衣つばいのを着て、寝技つばいのをやっている。普通の人が見たら、柔道と区別つかないだろう。でも、私だからわかるってわけじゃないだろうけど、それは柔道とは明らかに異質なものだ。まず、単純に見た目。道衣は白だけではなく、柔道でも珍しい青、さらには黒い道衣までいた。そして、さっきの男の人と同様、道衣のアチコちにワッペンや派手なパッチワークが施してあった。

でも、それ以上に私の目を引いたのは、動き。上手く道衣を掴み、巧みに足を使い、上からでも下からでも極めを狙う。柔道と同じような動作もあるが、こっちの方が動きがはるかに多彩で、何より面白そうだった。

「マジ、何コレ？」

中でやっている寝技への興味が強くなる。私は一步引いて、ガラスを眺めると、透明のロゴ入りステッカーが貼ってあった。

「ネック……、ウス？ ジウジツ、アカデミー？」

そこには——『NEXUS JIU-JITSU ACADEMY』——と書いてあり、その隣には、『BJJ ブラジリアン柔術』という、さらに大きなステッカーが貼ってあった。

そう。これが私と、柔道に変わる新しい生き方との出会いだった。

「ねえ、お父さぁん」

家に帰って。私は甘えた声を出す。

「一生に一度つきりの、お願いがあるんだけど……」

「毎年聞くな、そのセリフ。お前の一生は何回あるんだ？」

お父さんから呆れた声でツツコミが入る。

「細かい事は気にしない気にしない。そんな事よりも、コレ見て欲しいんだけど……」

私はお父さんに一枚のチラシを見せる。私はあのブラジリアン柔術を見た後、ドアのところにあつたチラシを貰って来た。内容は月謝やスケジュールなどの事務手続、それとブラジリアン柔術に対する説明が書いてあった。

お父さんはチラシを受け取り、黙々と読む。そして、「おお、グレイシー柔術か」と、呟いた。

「お父さん、知ってるの？」

「ああ、それほど詳しいわけじゃないけどな。大人で、それなりに柔道やっている人なら皆知ってるよ」

私の疑問に、お父さんはそう答える。私は全然知らなかったけど、柔道経験者ならそこそ知名度があるみたいだった。

「グレイシーって、何？」

私は続けて質問をする。ブラジリアン柔術についてはチラシを読んだけど、『グレイシー』という単語には触れられてなかった。

「グレイシーって言うのは、人の名前だ」

お父さんが説明を始める。

「昔、前田光世っていう強い柔道家がいてな。その人がブラジルでエリオ・グレイシーに柔道を教えて発展したのが、グレイシー柔術だ」

「へえ」

お父さんのトリビアに私は目を丸くする。

「そのグレイシー柔術がブラジル全土に広まって、日本の柔道とは別の形で進化したのがブラジリアン柔術ってわけだ」

「じゃあ、元は柔道から生まれたの？」

「大まかに言えばな。まあ、お父さんも詳しいところまではわからないけどな……」

お父さんがそこで話を区切って、目を通してたチラシを私に渡す。

「で、ひかり。お前はこれをやりたいって言うのか？」

「うん！」

お父さんの問いに私は大きく返事をする。お父さんは私の返事を聞いて、少し黙って考え込む。

「お父さんは、ひかりがその事を本当にやりたいと思うなら、やれば良いと思う」

その言葉に、私は一瞬パツと明るくなる。しかし――

「だが、陸上や自転車ならまだわかるが、何で柔術なんだ？ ひかりだって、お父さんやあかりと一緒に柔道をやってただろ？ 柔道じゃ駄目なのか？」

お父さんの続く言葉に、私の顔は一瞬で暗くなった。

私は押し黙る。お父さんも何も言わない。まあ、そりやそうだろう。一時期は、私の全てだった柔道。にも関わらず、ある日を境に完全に辞めてしまった。そして、また新たに柔道とほとんど同じ競技をやりたいと言っている。お父さんの疑問は当然だった。

「……わからない」

しばらくの間、沈黙が続いた後、私は口を開く。

「どう言えばいいんだろ？ 柔道はやってもいいような、やりたく

ないような、そんな感じかな？」

上手く言葉にできない。複雑というか何というか、柔道に対して気持ちの中で整理のつかない、もやっとしたものがあつた。それはあかりの事かもしれないし、柔道を辞めてしまった私の小さなブライドかもしれない。少なくとも、今の私の感情では、素直に柔道はできなかった。

だから、私は――

「私が今やりたいのは、柔道じゃなくて柔術。今はそれしか言えない」

それだけをハッキリと言った。私の返事に対し、お父さんは少し黙ってた後、「わかった」と小さく頷いた。

「さっきも言ったが、お前が本当にやりたいならやればいい。ただし、半端は許さないからな」

お父さんは私の顔をじつと見つめて、そう言う。私が目を逸らさずに頷くと、お父さんは笑って私の頭を撫でて、この場から立ち去った。

*

「それじゃあ、日野さんと及川さん。組んだら始めてください」

私が初めてブラジリアン柔術に出会ってから、一週間が経過。私は『ネクサス柔術アカデミー』に正式に入会した。

一週間、私は一度見学に行き、その次に体験入会として、一度練習に参加させてもらった。その間の付き添いはお父さんじゃなく、お母さんのヨーコ。

うちの財布はヨーコが握ってるので、お父さんよりもヨーコを説得しないと何もできなかった。最初は渋ってたヨーコだったけど、女性は入会費無料で月会費も安いらしく、最後はOKが出た。そして、今日が入会後の初めての練習となる。

練習時間は1時間半。練習内容は最初に軽いストレッチや受け身

の練習を行った後、柔術の技の練習を1時間をこなし、最後30分はスパーリング。要は柔道で言うところの乱取り。

前回の体験入会の時は、スパーリングをさせてもらえなかったの
で、今回は凄く楽しかった。

柔道を辞めて2年近く。寝技は得意だったけど、辞めてた間のブ
ランクがどう出るか、不安でもあった。とはいえ、今からやるのは
柔道じゃなくて、柔術。似て異なる、別の競技。

（先ずは、楽しまないと）

私はそう考えてリラックスした。

『お願いしまーす』

私と、相手の及川さんが一緒に礼をしてスパーリングを始める。

及川さんは栗毛色の髪を肩まで伸ばした女の人。海外メーカーの
赤い柔術衣に白帯を巻いている。

柔術は柔道と同じく、白帯から始まり、最後は黒帯になるらしい。
ただ、1年ちよいで黒帯になれる柔道と違い、柔術では黒帯になる
のは7〜8年は掛かるらしい。

それよりも驚いたのは、及川さんが着ている赤い柔術衣。何とか
って言う、有名な柔術家が着ているのと同じモデルらしくて、アチ
コチにド派手なパッチも付いていた。柔術衣は一般的な白や、青や
黒だけじゃなく、赤もあれば、黄色や緑に紫、さらには迷彩なんて
のものもあるらしい。

私の着ているのと言えば、ミズノのごく普通の柔道衣。しかも、
あかりの試合用を無断で拝借している。背中には『日野、ミナト中』
と、思いつきり苗字と学校名が入ったゼッケンが付いていた。

「シャア！」

ベーシックなスパーリングではお互い、膝を着いた状態から始め
る。寝技がメインの柔術では、立ち技から始まるスパーリングはあ
まりやらないしかった。

私は柔道の時と同じように組む。及川さんは私が組むのに合わせ
て、自ら下に寝転がって私の胴体を足で挟んだ。

「日野さん、先ずはズボンを持って、組まれてる足を外していきましよう。及川さんはある程度、攻めさせてからディフェンスを中心に」

私の後ろで先生が声を掛ける。先生の名前は草野先生。柔術黒帯で、この道場の代表。今も現役で試合に出場し、好成績を修めてるらしい。

私は先生に言われた通り、及川さんの足を持って外しに行く。及川さんも攻めさせるつもりのように、割りとすんなり足のロックを外す。

「足を抜いたら、サイドポジションに入って、そこからマウントを狙って」

先生がまた声を掛ける。私は及川さんと胸と胸を合わせ、重心を安定させながら足を抜く。そして、横から体を密着させて、サイドポジション、柔道で言う横四方固めに入る。

（マウントって、要は馬乗り状態になれば良いのよね？）

私は一回、体を及川さんに預けてから、一気に跨いでマウントになる。及川さんはまたもすんなりと攻めさせてくれた。

「日野さん、いいですよ。基本はいきなり技を狙いに行くよりも、マウントポジションを取りに行くを考えましょう」

先生はグツと親指立てて、褒めてくれる。ここで私は一度、縦四方固めの形を取って体勢を整えた。私が縦四方固めの状態で覆いかぶさっていると、下から及川さんが耳打ちしてきた。

「それじゃあ、日野さん。私は下から抜け出そうとするから、それを凌いでね」

そう言って、及川さんは少しずつ体を動かし始める。

「日野さん、マウントを返されないようにしながら、絞め技、関節技、何でもいいから知ってる技を狙ってみましょう」

柔術には抑え込みがない。だから、このまま縦四方固めでキープしてても、ほとんど意味がない。私は先生の指示に添い、体を起こして技を狙いに行く。

（技？ 何があつたかな？）

私は考えを巡らせる。知ってる技と言っても、私は絞め技をいくつか知ってる程度で、関節技は全く知らない。少年柔道の試合では絞め技、関節技は禁止されている。絞め技は柔道やっていた時にお父さんから予備知識として、教えてもらっていた。

そういえば、絞め技教えてもらった時、試しにあかりを絞め落としたら、物凄い怒られたっけ――。

そんな昔の事を思い出しながら、ふと下を見ると、及川さんが私の下で必死にもがいていた。その表情から、さっきまでの余裕は感じられず、かなり焦っているように見えた。

及川さんはブリッジ、エビを使って、なんとかマウントから逃れようとするが、私は逃がさない。私は及川さんの脇の下を膝で挟むようにしながら、重心を整える。重心を安定させ、私は襟を掴んで絞め技を仕掛けにいく。もちろん、及川さんも易々と攻めさせてはくれず、腕を出して防御する。私はもう一度、縦四方固めに入り、今度は下から左腕で及川さんの頭を抱える。

「ハア……、ハア……」

私の耳には及川さんの荒い息遣いが入ってくる。体は動かしてるが、疲れてるのか、さっきまでの勢いは無かった。私はじつくりと体を動かし、左手で自分の右の袖を掴む。

（上手くいくかなッ！？）

語尾に力が入る。袖を掴んだまま、私は右手首を返し、及川さんの首筋の辺りにねじ込む。そして、そのまま脇を絞って一気に首を締め上げた。そでくるまし袖車絞め。

「カハッ！」

及川さんの口から、潰れた声が漏れる。それと同時に私の体を数回叩き、『まいった』をした。私は素早く技を解いて、転がるように及川さんの上から退く。及川さんは体を起こして、軽く咳ばらいしながら苦笑いしている。

そんな及川さんを見ながら――

（柔術って、こんなもんなの？）
と、少し侮った気持ちになった。

「ありがとうございますっ」

結局、スパarringでは終始、私が圧倒していた。

及川さんの柔術のキャリアは1年半くらい。私の柔道歴の方が長いとは言え、2年近くのブランクがある。柔道時代の貯金でなんともなるのが柔術。多少は手加減してくれていたとは言え、肩で息をしている及川さんを見るとそんな気持ちになる。

正直、がっかりしたとか思っている、「バンワ、お願いしまーす」と言いながら、女子更衣室から一人の女の人が出てきた。黒髪のロングを一本に結わいた、白の柔術衣を着た女性。二の腕にちよつとした刺繍が入っただけの、シンプルな柔術衣に青帯が巻かれていた。

『こんばんはっ』

「こ、こんばんは……」

道場内にいる全員が挨拶する。少し遅れて、私も挨拶する。初めて見る女性。見学や体験の時にもいなかった。

「こんばんは、武藤さん。スパarringですけど、すぐ入れますか？」

「あ、大丈夫っすよ。体、温まってるんで」

先生と武藤さんが言葉を交わす。

「じゃあ、いきなりで悪いですけど武藤さんは日野さんと組んでください」

先生からの指名。私は今度は武藤さんという青帯の人とスパarringすることになった。

『お願いしまーす』

私と武藤さんは『パチンッ』と手を合わせると、さっきと同じく膝立ち状態から組み始めた。

「武藤さん。日野さん、結構イケるみたいだから、ガンガンやっち

やって良いですよ」

「え？ まじっスか？」

「大丈夫、大丈夫。でも、ある程度セーブしてくださいね」

私を跨いで、そんなやり取りをする先生と武藤さん。私も望むところと、気合いが入る。

「日野さんだっけ？ まあ、そういう事なんでチョイ強でやらせてもらうね」

武藤さんはそう言うのと、私の返事を待たずに両袖を掴んできた。

そして、さっきの及川さんと同じように自分から寝転んだ。さっきと違うのは、武藤さんは袖を掴みながら片足で私の二の腕を押し、反対の足を腰に当てる。

(う、動けない……)

何とか前に出ようとするが、足が邪魔で出られない。横に回ろうとしても、それに合わせてついて来られる。また、両袖をがっちり掴まれているので、自由が利かない。柔道では見られない動きに私は戸惑う。その間にも武藤さんは体をずらし、腕を絡めながら私をコントロールする。

「！」

そして、バランスを取ろうと片膝を付いた時、その足を思いつきり払われてしまった。

私はひっくり返されていた。一体、どうやってこうなったのかはわからないけど、足を払われた瞬間、武藤さんが動いて、気がつけばマウントを取られていた。私は体をブリッジしながら、マウントから脱出しようとする。しかし、私が動くよりも早く武藤さんは私の腕を取り、体を移動させ、そのまま倒れるように私の腕を伸ばした。

「アッ！」

腕が伸びた瞬間、私は思わず声が出る。そして、慌ててマットを叩いた。私の声か、私の『まいった』に反応した武藤さんは、素早く技を解き、転がりながら私から離れた。

「大丈夫、日野さん？ 腕、何とも無い？」

少し心配そうな顔をした武藤さんが声を掛けてくる。

「はい、大丈夫です。多分……」

私は伸ばされた方の腕をさすり、軽く振って感触を確かめる。特に痛みも無く、腕は何ともなっていないかった。今のは痛みが走ったとか、そういう事じゃなく、生まれて初めて関節技を極められた事に対して、体がびっくりしたって感じだった。

「そう？ なら、よかった……」

武藤さんはホッとしたような顔になる。

「じゃあ、続けよつかッ？」

武藤さんは笑顔で手を差し出す。私は武藤さんの手を叩いて、それに応えた。

武藤さんとのスパarring。私は最初から最後まで、武藤さんに良いようにやられてしまった。武藤さんの動きは、特に早くも無ければ、力強くも無い。ただ、淡々と、水が流れるように動き続けた。

今、武藤さんは及川さんとスパarringをしている。及川さんはガンガン攻めていくが、武藤さんは慌てずにそれをいなす。私は休憩しながら、それを見る。

「日野さん。武藤さんの動きをよく見た方がいいですよ。体力に依存しない、柔術の理想的な動きですから」

先生が私の隣で解説する。力を力で対抗するんじゃなく、力を技で捌くのが柔術だと言う。武藤さんは、体力的には決して優れた人じゃないらしい。でも、レスリングで県大会に優勝し、インターハイに出たという。それも、柔術のテクニクを取り入れて、成績が急に上がったっていいらしい。

その話の真偽はともかく、確かに武藤さんの技は良かった。武藤さんが凄いのか、柔術が凄いのかはまだよくわからないけど、柔道でいう『柔よく剛を制す』が、ここにはあるような気がした。

（さっきのは前言撤回……）

柔術はこんなもんなのか思ったのは、綺麗サッパリ忘れる。と
りあえずでも、柔術に浸かれるだけどっぴり浸かろうと思った。

序章六 あかり、中学生

「うっ、寒い……」

私は駐輪場に自転車を止めて、カゴからスポーツバッグを取る。そして、少しでも寒さから逃れるために、小走りで市民体育館に入った。

「はぁ、寒かった……」

12月。年が明けて、1、2ヶ月もすれば受験が始まる中学三年生の冬。私は受験勉強を一時中断して、ある重要な目的のために市民体育館にやって来た。

柔道の昇段審査。私はこの日行われる審査会で、高校受験より一足先に柔道初段の審査を受験する。

「あかりっ！ 遅いわよ！」

体育館に入ると、大きな声で私を呼ぶ声がする。

「あっ、みんなゴメン！」

呼ばれた声に振り返ると、そこには私の学校の柔道部のメンバーがいた。今日、昇段審査を受ける、私を除いた三年生の3人と、見学に来た後輩数名が集まっている。

「何してたのよ！？ もうすぐ受付終わるわよ！」

皆の恰好を見ると、みんな柔道衣に着替えている。受付も済ませてるみたいだった。

「マジで！？ じゃあ、すぐに行かないと！」

私は慌てて駆け出す。

「あかり、こっちこっち！」

友人が反対方向に走り出そうとした私の腕を掴むと、そのまま受付まで引っ張っていった。

「よかった、間に合って……」

受付を済ませ、私はホッとしたように呟く。

「よかつたじゃないわよ、1時間も遅刻してきて」

更衣室で柔道衣に着替える私に、村上是呆れたように言う。村上は私の同級生で、柔道部の副部長。県大会で個人戦ベスト8に入る、女子中量級のホープ。頼りにならない男子の部長を影で支える苦勞人である。

「もうアップする時間もないわよ。大体、何で遅れたのよ？ 時間は聞いてたでしょ？」

「はあ……。それはこれ……」

村上の当然の疑問に、私はため息をつきながら一枚の紙を見せる。
「え、なにになに？ 『お目覚めはいいかがかね、明智くん』。何コレ？」

「……ひかり」

私の答えに村上は思いつきり納得した。

昨日、私は今日の昇段審査に備えて、目覚まし時計をきっちりセットして寝た。しかし、ひかりがセットを解除して、私はまんまと寝坊した。1時間経ったところでお母さんに起こされて、大慌てで支度して、今に至ったわけである。

遅刻の原因を作った張本人は、私の知らない友達と都内まで出かけたらしく、抗議する事もできなかった。普段ならひかりのイタズラもまだ許せるけど、今日みたいな大事な日は本当止めてほしい。

「いやあ、お待たせ」

私は村上と一緒に他のメンバーの集まるところに合流する。

「お待たせじゃないって。審査、すぐ始まるわよ」

メンバーの一人が口を開く。

「マジ？ 私、ストレッチもしてないのに……」

「うらむなら、ひかりをうらむ事ね」

うなだれる私に村上が肩を叩く。そして、そのまま体育館のアリーナに入ってしまった。中に入ると、柔道衣姿の人間がわんさかと居た。

老若男女と多種多様。この中のほぼ全員が昇段審査を受ける人だ

ろう。アリーナの中には六面、畳が敷かれていて、例年通りなら二面を女子の審査で使用する。

「あら、あかりじゃない!」

「あつ、森ちゃん、久しぶり!」

後ろから声を掛けられて振り返ると、大きな体をした森ちゃんがそこに居た。森ちゃんは『杉本柔道教室』では一緒だったけど、元々、学区が違ったため、中学になってからは大会等の大きな行事以外で、めつきり会う機会が少なくなっていた。

「森ちゃん、また大きくなってない? 妊娠何ヶ月?」

「ええ、実はもう十ヶ月でそろそろ生まれそうなの……って、違うわ! アハハハハ!」

私の冗談に森ちゃんはノリツツコミして、大きく笑った。

「オハヨー、森永さん」

「村上ちゃん、ウィース」

森ちゃんと村上が挨拶する。社交的で気さくな森ちゃんは、学校の違うウチのメンバーのみんなとも仲がよかった。

「あかり、今日は10人抜きすんの?」

「しないよ、そんなに。私は3勝したら初段」

森ちゃんの言葉に苦笑いする私。

柔道の昇段審査は審査試合と形に分かれ、ところによっては筆記試験もあったりする。審査の基準や内容は地区によって結構違う。私たちの地区では、基本は試合で6勝し、形に合格すれば初段になれる。ただし、審査を受けるまでの大会での成績によって、勝ち数が変わったりする。また、4勝で茶帯二級、5勝すれば茶帯一級となる。

私の場合は大会実績があるので、今回は6戦して3勝すれば昇段だった。

「あかりは問題無いでしょ。2回に1回勝てばいいんだから」

「確かに。よほどの相手じゃない限りね」

森ちゃんと村上が私をおだてる。

「そんなことないって。結構、いっぱいいいなんだから」

二人の言葉に私は否定する。とは言え、胸の内では審査に対する不安よりも、昇段に対する期待と自信の方が大きかった。

『ミナト中、日野あかりさん』

「はい！」

突然、大きな声で名前を呼ばれ、びつくりして返事をする私。

『至急、第五試合場まで来て下さい。日野あかりさん、至急……』

話に夢中になって、気がつけば、館内アナウンスで名前を呼ばれていた。

「あかりセンパイ、もう出番ですよ！」

遠くから、後輩が私を呼ぶ。

「もう！？ 私、まだストレッチもアップも……」

「ハイハイ、うらむならひかりをうらみなさい」

「ダイジョブダイジョブ、あかりなら上手くやるって」

慌てる私に村上は意に解さず、森ちゃんは軽い口調で励ます。私は心の中でひかりを呪いながら、第五試合場に向かった。

「すみません！ お待たせしました！」

第五試合場に着くと、みんなが待っていた。審判を勤める先生方、そして対戦相手の人。

「何をやってたんだね？ 自分の順番を確認して、予めきちんと準備しておきなさい」

「はい、すみませんでした……」

主審の先生に注意されて、私は軽くへこむ。

（ちゃんと準備してたのに、ひかりのせいで怒られた……）

そんな事を思いながら、軽く体を解す。その時、試合場の周りがざわつき始めた。

「へえ、あれが……」

「そんなに強そうには見えないけど……」

「怪我がなかったら、間違いなく全国行ってたって……」

周りからいろいろな会話が聞こえてくる。会話の内容から察すると――

「あかり！ みんな、アンタのこと見てるよ！」

「ブザマなところは見せられないわよ、県大会準優勝者！」

森ちゃんと村上がはやし立てる。やっぱり、私の事のようなだった。周りの声を聞いて、私は気恥ずかしさを感じる。結果を出している事について褒められるのは嬉しいけど、注目を集めるのは苦手だった。ひかりだったら、ここぞとばかりにはしゃぐんだろうけど――。

「ふう……」

私は息を一つ吐いて、気持ちを試合に集中させる。そして、対戦相手を見る。相手は体格的に私よりも少し大きかった。階級では私よりも上だと思う。

「互いに、礼！」

主審の先生が号令を掛け、私と相手は礼をする。礼をして、私は体を軽く揺さ振って、再度体を解す。

「それでは……、始め！」

主審の先生から試合開始の号令が掛かった。

「シャア！」

それと同時に相手は一気に間合いをつめてきた。私は逆に襟を押さえながら、間合いを取って様子を伺う。間合いを取り、スローペースでじっくりと攻めたい私。しかし、相手がそうさせてくれないとにかく間合いを詰め、強引に組んでくる。それに対し、私は少し迷ったが、付き合う事にした。大会じゃないし、昇段に關しても、三回は負けてもいいから。

「トリヤア！」

「うわっ！」

相手は組むとすかさず投げを打ってきた。体を入れ替え、足で私の体を払い上げる。払い腰。『負けてもいい』なんて、気を抜いた瞬間の投げ。私は防御が間に合わず、あっさりと投げ飛ばされた。

「技ありい！」

『ボタン!』と畳を打つ音と共に、主審が腕を真横に出す。間一髪。私の体はぎりぎり脇から落ちて、何とか一本負けだけは免れたようだった。

「何やってんのよ、あかり!」

「ボサツとしてないで、すぐ立ってすぐ立って!」

外から激が飛んでくる。私はその声を聞いて、慌てて立ち上がった。相手も寝技には行かず、すんなり立ち上がる。私は寝技があまり上手くないので、それはありがたかった。

「それでは、はじめえ!」

一旦、仕切り直し。開始線に戻った後、お互い向き直って構え、主審の合図で試合を再開した。

(あぶないあぶない……)

私は心の中で舌を出す。負けてもいい試合だけど、やっぱり負けたくない。すでに技ありを取られてる状態だけど、ここから気持ちを入れ替える。

「サア!」

気合いと共に相手は攻めてくる。技ありを取った勢いで、一気にこうつてところだろう。私はそれを迎え撃つつもりで組みに行く。技ありを取られてるから、打って出なければ結局負けるからだ。

「よいしゃ!」

相手が襟を掴むのと同時に、私は左手で下から袖を掴む。そして、共に右組みでがっぷり四つに組む。

「サツ!」

組むと相手は前に出ながら、プレッシャーをかけてくる。時折、足をかけながらグイグイと押してくる。

「やあ!」

私は相手が出てきた瞬間に合わせて、技を仕掛けた。得意の背負い投げ。

「くっ!」

背負いに対して、相手は腰を引いて踏ん張る。

（ああ、動きが悪いっ）

相手の踏ん張りに私は担ぐ事ができなかった。いつもなら、多少強引に仕掛けても何とか担げるのに、体がついていかない。ストレッチもアップもしないで、いきなり体を動かしたからだ。しかも、始まってまだ半分も経ってないのに、無駄にスタミナだけ消耗してる気がした。

「あかり！ もう時間ないよ！」

時計を気にしながら、村上が声を上げる。

（そんな事、言ってたって……）

組みながら、私は内心愚痴る。結局、最初に技ありを取られてから、ずるずると終了間際までできてしまった。技がチグハグな私に対し、相手は積極的に攻める。何とかこらえてるが、反撃の糸が掴めなかった。

「あと半分（三十秒）！ 自分から攻める、自分から！」

村上の声が大きくなる。そして、相手も残り時間を聞いて前に出る。

「たりやあ！」

前に出てくるのを合わせて、再び私は背負いを打った。担ごうとした瞬間、『ズシリ』という重さが伝わってくる。相手も再び腰を引いて、投げに抵抗した。

（かかったっ！）

私は背負いの戻りざまに釣り手を離す。そして、間髪入れずに相手の股下に足を入れて引っ掛け、相手に上体を預けるように密着して、自分ごと一気に倒れ込んだ。

小内刈りの変形、小内巻き込み。

「だああああ！」

気合いと共に、空いた右手で引っ掛けてる相手の足を掴み、思いっ切り突っ込んだ。『バン！』という畳を打つ音。同時に倒れ込んだ私と相手。同時に顔を見合わせ、そして、同時に主審の顔を見た。

じつと主審の顔を凝視する。そして――

「一本！ それまでえ！」

主審が高々と右手を挙げ、一本勝ちを宣言した。

「ぶはあ……」

勝ちが告げられた瞬間、私は大の字になって大きく息を吐いた。何とか、ギリギリ勝ちを拾う事ができた。しかし、先行きは不安。初戦からこんなに大苦戦で大丈夫なんだろうか、自分で思う。

「礼！」

審判の声に合わせて礼をする。そして、対戦相手は下がり私は試合に残る。

審査は勝ち抜き戦で行われるため、私が負けるか、6人終わるまで続く。私は次の相手が来るまで、体を解して息を整える。今の試合で苦戦はしたけど、いろいろと動いた事で多少は体が軽くなった気がした。

「互いに礼！」

そうこうしているうちに、次の相手が試合場に入り、礼をする。

「それではあ！ 始め！」

そして、審判が試合を開始した。次の瞬間、私は――
「たりやあああ！」

――一気に間合いを詰めて、引き手を取る。そのまま、引き手を引きながら反転して担ぐ。

一本背負い。さっきの試合とは打って変わっての速攻。

「一本、それまでえ！」

作戦は大成功。畳の打つ音と同時に、審判は高々と右腕を上げた。

*

『よいしょー！』

場外から声が掛かる。再び『バタン！』という畳を打つ音がアリ――ナ内に響いた。

「技ありい！ 合わせて一本！」

「ぷはあ……」

主審の判定を聞いて、私は大きく息を吐いた。畳から体を起こして、汗を拭う。

「オツケー！ いいよ、あかり！ いいよお、あかりい！」

「あと一人！ あと一人で6人抜きよ！」

場外からみんなの声援が飛ぶ。なんだかんだ言って、結局ここまで来てしまった。たった今、合わせ技の一本で勝利し、私は5人抜きを果たした。既に初段合格の条件は満たしているので、あとは6人抜きが出来るかどうかだった。

私は開始線に戻り、息を整えながら相手を待つ。

「あ……、山崎さん」

試合場にやってきた選手に思わず声が出る。最後の相手として出て来たのは、かつて杉本柔道教室と一緒に練習していた山崎さんだった。

名前は山崎愛美。あの当時、女子ではひかりに次ぐナンバー2の実力者。私や森ちゃんとはあまり話さなかったけど、ひかりとは仲が良かったのを覚えてる。

山崎さんも森ちゃんと同じく学区が違ったため、中学になってからはほとんど疎遠となっていた。

「山崎さん、久しぶり」

「……」

私は道衣を直しながら、山崎さんに声を掛ける。でも、山崎さんは答えない。

「あの……、元気にしてた？」

「……うん」

私の言葉に小さく頷く山崎さん。顔の表情はほとんど変わらない。（相変わらずだなあ……）

昔から極端に無口な山崎さん。それは今でも変わらないらしい。ひかりはどうやってコミュニケーションを取ってたのか、不思議で

しょうがない。

「君。私語は慎みなさい」

「あ、はい。すいません……」

主審の先生に注意されて、私は口を紡ぐ。そして、道衣を整えて、一回大きく深呼吸をした。

「それでは、始めエ！」

私の準備が終わると、試合開始の号令が掛かった。

「さあ！」

「……」

試合が始まって、山崎さんは動かない。元々、積極的に攻めず、じっくりと相手の出方を待つタイプ。私の知ってる限りでは、山崎さんが自分から攻める試合は見たこと無かった。

（さあ、どうしよう？ こっちから攻めるか、それとも待つか）

正直、ここまで5戦してクタクタに疲れてた。6人抜き達成目前とはいえ、初段は既に合格してる。

迷った。

「あかり！ 何してんのよ！」

「ボヤボヤしてないで、自分からいかないと！」

お互い、組まずに様子を伺っていると、村上達が激を飛ばしてきた。（疲れてるんだけどなあ……）

何食わぬ顔で内心ボヤく私。村上達の言う事はちっとも間違っていないけど、私は疲れもあって、もう少し山崎さんの出方を見たかった。とは言え、このままじゃ埒が開かないし、うっかりしていると指導を取られかねない。

「やあ！」

私は自分を奮い立たせるように声を出すと、素早く間合いを詰めて組みに行った。

「……」

私が組もうとすると、山崎さんもそれに合わせて組んでくる。

（あれ？ 結構、簡単に組ませてくれた？）

山崎さんが組むよりも早く、私が右で組む。でも、次の瞬間——
「うわっ！」

山崎さんはコマが回るように私と体を入れ替えながら、私の足を
払ってきた。

変形の支え釣り込み足？

（ととと……！）

私は山崎さんにしがみつき、何とか倒れないように抵抗する。

「有効！」

堪えたものの、半身で膝を付いた私を見て主審は有効を取る。し
かし、私はその有効を気に止めなかった。何故なら、山崎さんが猛
然と覆いかぶさってきたからだ。

（ヤバッ！）

乗ってこようとする山崎さんに対し、私は慌てて身構える。無口
で大人しい、待ちの柔道のように見えて、ここぞという攻め所はき
ちんとわかっていた。

私はエビで距離を取り、体を丸めて亀になった。山崎さんがもつ
とも得意なのは、寝技。柔道教室時代、一番寝技ができたのは山崎
さん。力や体格で勝る森ちゃんを面白いように圧倒してたのを覚え
てる。

ひかりでさえ、総合力では勝っていたけど、寝技では何度か仕留
められていた。そんな山崎さんに私ができるのは、亀になって『待
て』が掛かるのを待つ事。昔から背負いの練習しかしてこなかった
私は、ホントに寝技が苦手だった。

亀になった私に対し、山崎さんは私の背中に手をつき、右手を耳
の後ろから突っ込んできた。

（送り襟絞め……！）

私は自分の襟を取られないようにしっかりと掴む。しかし、山崎
さんは襟を取らずにさらに手を入れてきた。

（あれ？ 絞め技じゃない？）

私がそう考えてると、今度は左手を脇の下から差し込んできた。

そして、差し込んだ両手を、私の襟を掴んで腕ごと、襷掛けの様にクラッチした。私の背中に山崎さんが密着する。私の耳に山崎さんの息遣いが伝わってくる。気のせいかな、『クンクン』と匂いを嗅ぐ音も聞こえてくる。

（えっ？　ちょ、ちょっと……）

一瞬、なんか妙な寒気と変な妄想が頭を過ぎった。当然の事ながら、私にはその手の趣味はない。でも、耳元で何か囁かれたらどうしよう。そんな事が頭に浮かぶ。しかし、私のそんなしょうもない考えとは関係なく、山崎さんは亀になってる私の体に足を入れてくる。

「わっ！」

片足が脇に絡まった瞬間、山崎さんは密着したまま私ごと横に転がった。思わず声が出る。そして、大ピンチ。私は亀を返され、無防備に背中を取られていた。しかし、私は慌てなかった。慌てなかったと言いか、私が慌てるよりも早く山崎さんは私の襟を掴み、そのまま送り襟絞めまで持っていていた。

気付いた時には既に絞められていた私。そんな私にできるのは、畳を叩いて『参った』する事だけだった。

「一本、それまでえ！」

主審の声と同時に山崎さんが技を解く。技を解かれた私は、絞めの影響で咳込みながら立ち上がった。

「ありがとうございます……」

息を整え、礼をする。5人抜きでクタクタだったとは言え、最後はあっさりと仕留められてしまった。

（寝技……。高校に向けての大きな課題だなあ……）

負けた事は少し悔しい。でも、悔やんでも仕方ないので、次に向けて切り替える。

「……あかり」

あれこれ考えながら試合場を下がろうとすると、後ろから声が掛かった。

「山崎さん？」

後ろを向くと、わずかに息を切らせた山崎さんが側にいた。

「ひかりは、もう柔道はやらないの……？」

山崎さんの口から出た名前に少しドキツとする。3年前、完全に柔道を辞めてしまったひかり。あれ以来、ひかりから柔道の話は聞いた事ないし、柔道について話した事もない。

「どうかな？ でも、多分……」

ひかりが今、柔道に対してどう考えてるかは知らない。でも、何事も無かったかのように再開するとも思えない。なので、山崎さんの問いに対して言葉が濁った。

「……そう」

そんな私の考えを察したのか、山崎さんはどこと無く淋しそうな表情を浮かべる。

「それじゃあ、また会いましょう……」

しばらくして、再び無表情になった山崎さんの口から出たのは、意外にも再会の言葉だった。

「返す返すも、あれは無いんじゃないの？」

自動販売機で買ってきたジュースを片手に、村上がそう言った。昇段審査の全日程を終えた私達は、のんびりと体育館のロビーで寛いでいた。もちろん、柔道衣から学校の制服に着替えている。

「まあまあ、いいんじゃない？ 初段合格できたんだからさ」

私達の学校の中に、何故か混ざってる森ちゃんがフオローするよう言う。

話は私の最後の試合の反省会。山崎さんにあっさりと負けた私について、村上と森ちゃんがあれこれ話している。試合した張本人である私は、負けた人間ということで発言権は無かった。

二人が話してるのを他所に、私は山崎さんの言葉を思い返す。――ひかり。ひかりは柔道に対して、何を考えてるのか。柔道を辞めた時、表面上は普段と変わらず明るいひかりだったけど、胸中はどう

うだったんだろう？

そして、今は。ひかりが柔道やってた時、私はひかりと比べられるのが嫌だった。ひかりの憎まれ口に傷ついた時もあった。それでも、ひかりが勝った時は自分の事のように嬉しかったし、誇らしかった。

今、私が試合に勝つようになって、その喜びをひかりと分かち合えないのは、少し寂しかった。

序章七 ネクスト・ステージへ

「ありがとうございますあ」

武藤さんとのスパarringを終えた私は汗を拭いながら礼をする。握手をし、道場の端に外れて腰を下ろす。

「クソー。今日こそ武藤さん極めてやろうと思ったのに……」

タオルでもう一回、汗を拭いながら息をつく。

「ふっふっふ、まだまだ日野ちゃんには取らせるつもりはないからね」

私の隣に座って、髪を解きながら武藤さんが笑って言う。

柔術を始めて、一年以上が経過。試合にも出て勝ちを収める様になっても、武藤さんには未だに勝った事はなかった。ちなみに、及川さんとは一進一退で、勝率も五分五分といった感じだった。

「あ、そういうば、日野ちゃん。明日が卒業式なんだっけ？」

一息ついて、髪を結わき直しながら武藤さんが話を振ってくる。

「ああ、そうです。明日でやっと卒業です」

季節は春。高校受験を無事に終えた私は明日、中学の卒業式を迎える。

「どう？ 4月から女子高生になる気分は？」

「えっ？ 別に何もないですけど……」

「ええっ！ 女子高生よ！ 『ぢよしこうせい』になるんだよ！」

私の答えにガク然とし、やたらと大きなリアクションを返す武藤さん。『ぢよしこうせい』ってそんなに特別なモノなの？

「そうだ。あの、武藤さん……」

『ぢよしこうせい』はともかく、私はある事を思い出した。

「この前、武藤さんに言われた事なんですけど……」

「えっ、何？」

私の答えに大きなため息をついていた武藤さんが顔を上げる。

「ジャパン・カップの打ち上げの時に言ってた……」

ジャパン・カップと言うのは柔術の大会名。その時、私は一つの悩みを武藤さん達に打ち明けていた。

「ああ、あれ？」

武藤さんは察したように頷く。

「いろいろと考えたんですけど、武藤さんのアドバイスの通りにしようかなって思ってた……」

「あつ、そう。うん、その方がいいと思うよ」

私の答えを聞いて、武藤さんは笑って私の肩を叩く。

「日野ちゃんとは事情が違うけど、私も高校時代はそうやってたからねえ。その決断は絶対、日野ちゃんのプラスになるよ。私が保証する」

そう言って、今度はグツと親指を立てた。

「それじゃあ、日野ちゃんのその決断に敬意を表して、もう一本スパーしようか」

武藤さんは笑ってそう言いながら立ち上がる。

「いやいやいや、何で敬意を表するのがスパーに繋がるのかは全然わからないんですけど……。でも、スパーなら受けて立ちますよ」

私もそう言って、肩を回しながら立ち上がった。どこか、気持ちが悪くスツキリしたようなのを感じながら。

*

「それでは、先輩方。卒業、おめでとうございまーす！ 乾杯！」
『カンパァー！』

乾杯の音頭と共に、私たちは手にしたグラスを高く掲げた。そして、グラスに口を付けた後、拍手が沸き起こった。

場所は学校の近所にあるカラオケボックス。今日、卒業式を迎えた私たちを祝うために、女子柔道部有志の卒業カラオケパーティーが行われていた。

「それでは、しばし、ご歓待を。その後、カラオケ大会に移りたい

「と思いますっ」

『いえーい!』

幹事を務めている望月がマイクを片手に司会進行する。望月は村上の後を継いだ柔道部の新副部長。男子部と共に、これからのミナト中柔道部を盛り上げて欲しい。

「はあ。ホントに卒業しちゃったんだね……」

私は誰に言うわけでもなく、ポツリと呟く。

「何、しみりした声出してるのよ」

隣に座ってる村上がグラス片手に私の方を見る。

「いや、もう学校ともみんなともお別れだと思うと……」

そう言いながら、私はウルツと涙ぐむ。今日はどうしようもなかった。村上いわく、涙脆い私は卒業式の始まりから終わりまで、ずっと泣きっぱなしだった。

そして、それを『何、泣いてんのよ。気持ち悪い……』と、ケロツとしてるひかりにバカにされていた。

「会おうと思えば、いつでも会えるじゃない。それに、みんな高校でも柔道やるんだから、試合会場でも顔を合わせるだろうしね」

グラスのジュースを飲みながら、村上が言う。確かにそうだった。今日、私も含めて6人卒業するが、全員、高校でも柔道を続ける予定で進路が決まっていた。

「村上はヤチナカだもんね」

「当然。県下ナンバー1だもん」

村上は千葉県の高校女子柔道で、一番強い学校に進む。

「大島と黒澤はミハマだし、可奈子はエイトク。奈津子はどこか忘れたけど……」

村上が名前を挙げたミハマもエイトクも、女子柔道の強豪校。私たちの代は個人、団体共に強かったため、色々と推薦の話が来た。

「しかし、あかり。アンタ、ホントにミサキで良いの?」

「うん」

ミサキは私の進学先。柔道については、はっきり言ってそんなに強くない。家から近いってだけで選んだ学校だった。

「私は……、柔道はまだ、お父さんとやりたいから」

自慢じゃないけど、私にも推薦の話はあった。だけど、私はそれを全部断った。

理由は、ただ一つ。私の柔道の原点はお父さん。そのお父さんと柔道できる環境を、きちんと残しておきたかったからだった。私の選択が正解かどうかはわからない。でも、これからの高校柔道でも、これだけは外せなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4642q/>

Triple J

2011年1月28日11時40分発行